# 三國志

巻の十四

# 三國志

四十の巻

吉川英治著

三國志卷の十四

昭和二十一年九月一日初版印刷
昭和二十一年九月十日初版發行

定價 四拾圓

不許複製

著者 吉川英治
東京都小石川區音羽町三丁目十九番地

發行者 尾張眞之介
東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二

印刷者 小坂孟
東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二

印刷者 (東京一) 大日本印刷株式會社

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社
東京都小石川區音羽町三丁目十九番地
振替口座 東京三九三〇
電話 九段(33) 一三〇—一三九 一八〇—一八六—一八九

配給元 日本出版配給株式會社 (東京都神田神保町二ノ九)

# 目次

## 五丈原の卷


總兵之印……二
司馬仲達計らる……一三
天血の如し……二〇
長雨……三二

賭……三九
八陣展開……五六
籠……六三
麥青む……七二
北斗七星旗……七九
木門道……八九
具眼の士……一〇〇
木牛流馬……

此为试读，需要

ネヂ……一二五
豆を蒔く……一三八
七盞燈……一四四
水火……一五五
女衣巾幗……一六九
銀河の禱……一八三
秋風五丈原……一九四
死せる孔明・生ける仲達を走らす……二〇九

松に古今の色無し……二二四
篇外餘錄
諸葛菜……二三二
後蜀三十年……二五五
魏から晋まで……二七六

裝幀　恩地孝四郎
挿繪　矢野知道人

# 五丈原の巻

# 總兵之印

## 一

蜀魏兩國の消耗をよろこんで、その大戰のいよ〳〵長くいよ〳〵酷烈になるを希つてゐたのは、いふまでもなく吳であつた。

この時に當つて、吳王孫權は、宿年の野望をつひに表面にした。すなはち彼もまた、魏や蜀にならつて、皇帝を僭稱したのである。

四月。武昌の南郊に盛大な壇をきづいて、大禮の式典を行ひ、天下に大赦を令し、即日、黃武八年の年號を、黃龍元年とあらため、先王孫堅に對しては、武烈皇帝と謚して、こゝに、吳皇帝の即位は終つた。

嫡子の孫登ももちろん同時に皇太子にのぼつた。そしてその輔育の任には、諸葛瑾の子諸葛恪を太子左輔とし、張昭の子張休が太子右弼を命ぜられた。

諸葛恪は、血からいへば、孔明の甥にあたるものである。資質聰明、聲は甚だ淸高であつたと

いはれる。幼時から夙に、神異の才を稱へられ、その六歳の時に、こんな事もあつた。

或る折、吳王孫權が戲れに、一匹の驢馬を宮苑に曳き出させ、驢の面に、白粉を塗らせて、それへ、

諸葛子論

といふ四文字を書いた。

けだし、これは、諸葛瑾の顏が、人いちばい長面なので、それを揶揄して笑つたのである。だが、君公の戲れなので、當人も頭をかいて共に苦笑してゐた。

すると父のそばにゐたまだ六歳の諸葛恪が、いきなり筆を持つて庭へとび降り、驢の前に脊伸びして、その面の四文字の下へ、また二字を書き加へた。

人々が見ると、すなはち、

諸葛子論之驢

と、讀まれた。見事、からかはれてゐる父の辱を雪いだのである。現今中國人のあひだでよく云はれる「面子」なることばの語源がこの故事から來てゐるものか否かは知らない。

この輔弼に加へて、更に、丞相顧擁、上將軍陸遜をつけて共に太子を守らせ、武昌城において、孫權はまた、建業に還つた。

かくて、魏蜀戰へば戰ふほど、呉の强大と國力は日を趁うて優位になるばかりなので、宿老張昭はかたく、兵をいましめ、產業を興し、學校を創て、農を勵まし、馬を養つて、ひたすら、他日にそなへながら、一面、特使を蜀へ派して、なほ〳〵善戰を慫慂してゐた。

また、その特使の使命には、

『このたび、わが呉に於いても、前王孫權が登極して、皇帝の位に即かれました』

といふ發表を傳へて、國際的にこれを承認させる副意義もあつたこと、もちろんである。

その特使は、成都へも、漢中の孔明の所へも同樣に臨んだ。孔明は心のうちに安からぬものを抱いたにちがひない。なぜといへば、彼の理想は、漢朝の統一にあるからである。天に二つの日なしといふ信念が、彼の天下觀だからである。しかし今はそれを唱へてゐられない時であつた。ひとたび呉が離脫せんか、魏と結ぶことは必然である。かくては永遠に蜀の興隆はない。蜀亡ぶときは、彼の理想もつひに行ひ得ないことになる。

『それは實に慶祝にたへない。いよいよ呉蜀兩帝國の共榮を確約するものです』

孔明も直ちに、漢中の禮物を山と積ませて、呉へ賀使を送り、慶びの表を呈した。

そして、ついでに、

『いま、貴國の强兵を以て魏を攻めらるれば、魏は必ず崩壞を兆すであらう。わが蜀軍が不斷に



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼を打ち叩いて、疲弊に導きつゝあるは申すまでもありません』

と吳へ申し入れ、また朝野に向つて、時は今なることを、大いに鼓欣宣傳させた。

陸遜は、にはかに建業へ召還された。彼の意見を徵すべく吳帝は待ちわびてゐた。

『どうしたものだらう、蜀の要請は』

『修好の約ある以上、容れなければなりますまい。けれど、多くを蜀に勞させて、魏はもつぱら虛をうかゞひ、愈〻といふ時、洛陽へ入城するものは、孔明より一足先に、わが吳軍であれば最上でありませう』

『さうありたいのだ』

孫權は快げに笑つた。

## 二

孔明は三度目の祁山出兵を決行した。

その動機は、陳倉の守將郝昭が、このところ病に罹つて重態だといふ確報を得たからであつた。

郝昭は、洛陽へ急を報じ、自分に代る大將の援軍を仰いだ。

長安にある郭淮は、

『それでは遲い。奏上はあとでするから、御邊はすぐ向へ』

と、張郃に三千騎を附して、すぐ陳倉城へ援けに向はせた。

――が、この時はもう遲かつたのである。郝昭は死し、陳倉は陷ちてゐた。

どうしてかう迅速だつたかといへば、頻りに孔明の來襲を傳へたものは、實は姜維、魏延などの一軍で、その本軍は疾く密かに漢中を發し、間道をとつて、世上の耳目も氣づかぬうちに、陳倉城の搦手に迫り、夜中、亂破を放つて、城内に火を放け、混亂に乘じて、雪崩れ入つたものだつた。

だから味方の姜維や魏延が城中へ來たときですら既に落城のあとだつた。いかに魏の張郃が急いで救援に來たところで、到底、間にあふわけは無かつたのである。

『丞相の神算は、つねに畏服してゐるところですが、かゝる電擊的な行動は、われらも初めて見るところでした』

姜維、魏延たちは城中に入つて、孔明の車を拜すと、心からさう云つて、それに額かずにゐられなかつた。

孔明は、落去の趾を視察して、火中に死んだ郝昭の屍を搜させ、

『この人は敵ながら、その忠魂は見上げたものだ。死すとも朽ちさすべき人ではない』

と、兵を用ひて手篤く葬へと命じた。

孔明は又、二人へむかひ、

『こゝは陷ちたが、爾所ともにまだ甲を解くな。直に、この先の散關へ馳けよ。もし時移さば、魏の兵馬充滿して、第二の陳倉となるであらう』

と、云つた。

姜維、魏延は、畏まつて候、とばかり息つく間もなく散關へいそいだ。

關は手薄だつた。

ために難なく乘つ取ることを得たが、蜀旗を揭げてわづか半日ともたゝないうちに、士氣すこぶる旺な魏軍が、えい〳〵と武者聲あはせて襲せ返して來た。

『すはや、丞相の先見あやまたず、魏の大軍がはや來たとみえる』

望樓にのぼつて、これを望み見るに、軍中あざやかに、魏に其人ありとかねて聞く、『左將軍張郃』の旗が戰氣を孕んでひらめいてゐた。

しかし、これまで來てみると、すでに散關すら蜀軍に奪られてゐたので、いたく失望したものであらう、やがて張郃の軍は、にはかに後へ回つてゆく樣子だつた。

『追ひ崩せ』

蜀勢は、關を出て、これを追つた。ために張郃の勢は、若干の損害をうけたのみならず、むなしく長安へ潰走した。

『この方面の態勢は、まづ定まりました』

姜維、魏延から孔明へすぐ戰況をつたへた。

孔明は、この報をつかむと、

『よし、機は熟す』

となして、いよ〳〵總兵力をあげて、陳倉から斜谷へすゝみ、建威を攻め取つて、祁山へ出馬した。

こゝは二度の舊戰場だ。しかもその兩度とも蜀軍は戰ひ利あらず、退却のやむなきを見てゐるのである。孔明にとつては實に痛恨の深い地であるにちがひない。彼は、帷幕の將星をあつめて告げた。

『魏は二度の勝利に味をしめて、このたびも舊時の例にならひ、我かならず雍・郿の二郡を窺ふであらうとなして、そこを防ぎ固めるにちがひない。……故に我れは、鉾を轉じて陰平、武都の二郡を急襲せん』

孔明の作戰は、その陰、武二郡を取つて、敵の勢力をその方面へ分散させようとするにあつたらしい。しかし敵の兵力を分けさせるためには、自己もまた兵力を分けねばならなかつた。それにさし向けた蜀軍の兵力は、王平の一萬騎と、姜維の一萬騎、あはせて二萬の數だつた。

## 三

長安に引つ回した張郃の報告を聞き、また孔明の祁山出陣を聞いて、郭淮は驚きに打たれた。

『さもあらば、蜀勢はまた雍・郿の二郡へ攻めかゝるだらう。張郃、足下はこの長安を守れ、われは郿城を固め、雍城へは孫禮をやつて防がせよう』

即座に彼は、兵を分けて、その方面へ急行した。

張郃は、早馬に次ぐ早馬を以て、祁山一帶の戰況を洛陽へ告げ、

『大兵と軍馬を、續々下し給へ、さもなくば、事態豫測をゆるさず』

と、電請した。

魏朝廷の狼狽はたゞならぬものがあつた。何となれば、この時すでに、呉の孫權の帝位登極のことが傳はつてゐたし、續いて、蜀呉の特使交換やら、更には蜀の要請に從つて、武昌の陸遜が、大兵力をとゝのへ、今にも魏へ攻め入らうとする空氣が濃厚にみなぎつてゐるなどといふ一

ー魏にとつて不氣味きはまる情報がやたらに入つてゐるからであつた。

蜀も強敵。吳もいふまでもなく大敵。かうなるといづれに重點をおいてよいのか、魏廷の軍政方針は紛々議論のみに終つて、その實策を見失つてゐるのであつた。

『司馬懿に問ふしかない』

重將宿將多しといへども魏帝もつひにはひとりの仲達に恃みを歸するしかなかつた。

『いそぎ參朝せよ』

と、召せばいつでも、素直に出てくる司馬懿であつたが、闕下に伏しても、この頃の風雲にはまるで聾のやうな顏をしてゐた。

けれど、帝が下問すると、

『そんな事は、深くお迷ひになる迄もない事かと思ひます』

と、その定見を、する〳〵と糸を吐くやうに述べた。

『孔明が吳をけしかけたのは當り前な考へです。吳がこれに應じるのも先づ修交上當然といへませう。けれど吳には陸遜といふ偉物が軍をにぎつてゐます。又、吳が率先拠身しなければ、條約に違ふといふ理由はありませんから、攻めんといひ、攻めるぞとみせ、實は軍備ばかりしてゐて、容易にうごかず、蜀の戰ひと、魏の防ぎを、睨み合せて、ひたすら機を測つてゐるものにち



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com